英語学習意識を表すメタファー表現の探索
Metaphorical expressions for English-learning consciousness: An exploratory study

篠原 和子†，岡野 一郎†，宇野 良子†
Kazuko Shinohara, Ichiro Okano, Ryoko Uno

†東京農工大学
Tokyo University of Agriculture and Technology
k-shino@cc.tuat.ac.jp

概要

英語学習，英語技能習得を自己拡張のひとつと捉え，これをメタファー文への評定課題によって探索するため，アンケート調査を行なった．日本語を母語とする大学生が自己の英語学習についての意識をどのようなメタファーに近いと捉えるか，主体性の拡張や身体の所有感の拡張に関連する表現を含むメタファー文を用いて調べたところ，英語が「好き」「得意」という主観的自己意識，および「習熟度が高い」という客観的英語力のいずれの場合でも，「接近可能な屋外の空間」のメタファー表現に英語学習意識との関連が現れやすいことが示唆された．

キーワード：概念メタファー，英語学習，自己拡張

1. はじめに

言語は人間にとっての自己拡張である，という議論がこれまで多くなされてきた[1]．では，英語学習者にとっての英語はどうであろうか．本稿は，学習者がどのように英語を捉えているのかを，自己拡張という観点から検討する．

自己の拡張の方向は，一つではないと考えられる．例えば，他から影響を被る存在としての自己の身体の所有感の拡張という捉え方（自分の服を汚されると自分自身が汚された感じがするなど）[2]もあるし，他に影響を与える主体性（agency）の拡張（包丁を使うことで外部の物体を変形させる力を持つなど）という捉え方もある．これらの自己拡張の捉え方を参考にしつつ，本稿では，認知言語学の概念メタファー理論を分析手法として用い，学習者が英語を何に喩えるかという観点から，学習者の英語観・自己拡張感を明らかにするための手がかりを探る．

今回は，メタファー表現の探索であるので，アンケートを回答する学生の答えやすさを優先し，英語そのものではなく，「英語のスキル」について，身近な 24 の事物に喩えた比喩文を実験材料とした．これらの事物には，自己の身体の部分や身体所有感の拡張となる衣服・装飾品，自己の身体によって探索できる空間，自己の主体性の拡張である道具などを含めた．

2. 実験方法

2-1. 参加者

本実験は，東京農工大学研究倫理委員会による認可を受けて実施した．理工系学部生 74 人（19〜33 歳）がオンライン・アンケートに参加した．

2-2. 材料

刺激文として，「**私にとって英語のスキルは X のようなものだ**」という文（日本語としての不自然さを減らすため直喩標識を入れたが，今回はメタファー文として扱う）の「X」に 24 の名詞句（表 1）を 1 つずつ挿入した 24 個の文を用意した．これらの名詞句は，自己を「身体所有感」もしくは「主体性」に基づいて拡張したと捉えられる身近な事物を中心とした．表現は 3 つ 1 組とし， 1〜15 は「身体からみた自己所有感」の拡張の度合いにより 5 区分に分けた．これは身体を基点とする距離・分離度の順序にほぼ対応する（表 2）． 16〜18 は「道具」，19〜21 は「移動手段」，22〜24 は「親しい他者」に区分でき，「主体性」の拡張に相当する．

2-3. 手順

参加者は，ボタン押下による同意の後，練習問題に回答し，次にランダムに 1 つずつ呈示される 24 の文をそれぞれ 5 段階尺度（1=まったくそう思わない 〜 5=そのとおりだと思う）で評定した．次に，参加者の特徴に関する補足質問として，①英語はどのくらい好きか，②英語は得意なほうか，③将来英語が上手に使えるようになりたいか，の 3 問にそれぞれ 4 段階尺度（①： 1=とても好き，2=どちらかというと好き，3=どちらかというと嫌い，4=大嫌い；②： 1=とても得意，2=どちらかというと得意，3=どちらかというと苦手，4=とても苦手；③： 1=なりたい，2=どちらかというとなりたい，

3=どちらかというとなりたくない，4=なりたくない）で回答した．また，④TOEFL ITP®スコア（50 点ごと 8 段階）を回答した（これは参加者が実験実施のおよそ 1 ヶ月半前に大学で受験していたものである）．

表 1　実験刺激文に用いた語句

#	語句	身体所有感	主体性
1	自分の心臓	＊＊＊＊	
2	自分の骨や肉		
3	自分の手や足		
4	勲章	＊＊＊	
5	アクセサリー		
6	外出着		
7	自分の部屋の窓	＊＊	
8	自分の部屋から出られるドア		
9	別の部屋へと通じる廊下		
10	自分の家の庭	＊	
11	近所の公園		
12	家から駅へ向かう小道		
13	遠くに見える水平線	－	
14	地平線からのぼる朝日		
15	大草原のむこうの湖		
16	使い勝手のよい文房具		＊＊＊
17	便利な通信機器		
18	いろんな物が作れる工具		
19	別の街へ行くバス		＊＊
20	空港から飛び立つ飛行機		
21	港から沖へ向かう船		
22	可愛いペット		＊
23	親しい友だち		
24	ちょっとした知り合い		

表 2　身体からの拡張区分

	区分1	区分2	区分3	区分4	区分5
身体との関係	身体の一部分	身体への付着物	接触可能な屋内の空間（自分のスペース）	接近可能な屋外の空間（自分のスペースに隣接した場所）	自分のスペースとは隣接しない遠い場所
番号	1～3	4～6	7～9	10～12	13～15

3.　結果

3-1. 身体からの拡張区分：全体の傾向

表 2 は，表 1 の語句のうち 15 語を 5 区分に分けたものである（これらの区分は身体との距離・分離度の順序構造をもつが，相互に均等な間隔ではない）．各区分のメタファー文への全参加者の評定値平均は，それぞれ 2.21, 2.69 2.58, 1.68, 2.05 であった（図 1）．特に区分 4（接近可能な屋外の空間）の評定値が他と比べて低い．参加者ごとの平均値をもとに，区分を要因とする一元配置分散分析を行なったところ，有意差がみられた（$p < .01$，$\eta^2 = .15$）．隣接する区分ごとの多重比較では，区分 1 と 2，区分 3 と 4，区分 4 と 5 にそれぞれ有意差（ボンフェローニ補正後）がみられた（$ps < .01$）．

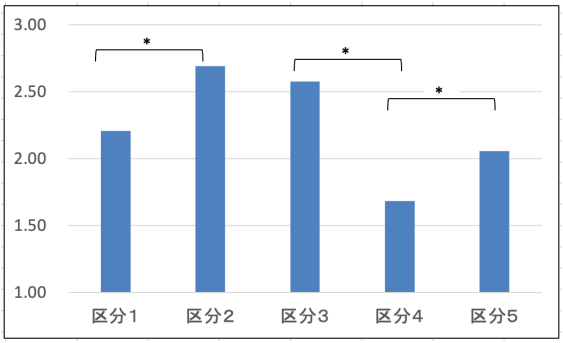

図 1　区分ごとの平均値

このように，メタファー表現と英語スキル意識の合致度には，自己の身体からみた拡張区分による違いがあるものの，その順序にしたがって評定値が変化しているわけではない．たとえば身体との距離が近ければ近いほどメタファー表現が学習者の英語スキル意識と合致しやすい（あるいはその逆），ということではない．

そこで，個々の区分を名義尺度として個別にとらえ，英語の習熟度や英語が好きかどうかといった学習者の特徴とこれらの区分の関係を，さらに詳しく分析する．

3-2. 参加者の特徴による 2 群の比較

参加者の特徴に関する補足質問①～③は，肯定的回答（1 または 2）と否定的回答（3 または 4）の 2 群に分け，④は 500 点を境界として上下 2 群（501 点以上・500 点以下）に分けた．それぞれの群の参加者数は以下の通りである．

① 英語が好き：31 人・嫌い：43 人
② 英語が得意：20 人・苦手：54 人
③ 英語が使えるようになりたい：70 人・なりたくない：4 人
④ 501 点以上：24 人・500 点以下：50 人

このうち③は著しく偏っていたため分析から除外した．

24 種類のメタファー文すべての評定値の平均はそれぞれ，①「好き」群 2.57，「嫌い」群 2.28，②「得意」群 2.71，「苦手」群 2.29，④「501 点以上」群 2.63，「500 点以下」群 2.30 であった．①，②，④いずれにおいて

も，群間の差は有意ではなかった．

3-3. 身体拡張区分ごとの傾向

①，②，④の質問項目それぞれの 2 群について，表 2 に示した区分ごとの評定値の平均を図 2～図 4 に示す（縦軸はスコア平均）．①，②，④に関し，それぞれの 2 群間で各区分のメタファー文の評定値平均の差をT検定により検証した．ホルム=ボンフェローニ法による補正後に有意となったのは，以下であった：

① 英語が好きかどうかでは，区分 4 で「好き」群が有意に高い同意を示した（$t = 3.15, p < .0026$）．

② 英語が得意かどうかでは，区分 4 で「得意」群が有意に高い同意を示した（$t = 3.97, p < .0005$）．

④ 英語習熟度では，区分 1 と 4 で「501 点以上」群が有意に高い同意を示した（1: $t = 3.60, p < .0008$, 4: $t = 2.90, p < .0064$）．

このように，区分 4 は①，②，④すべてにおいて 2 群間の差が有意であった．

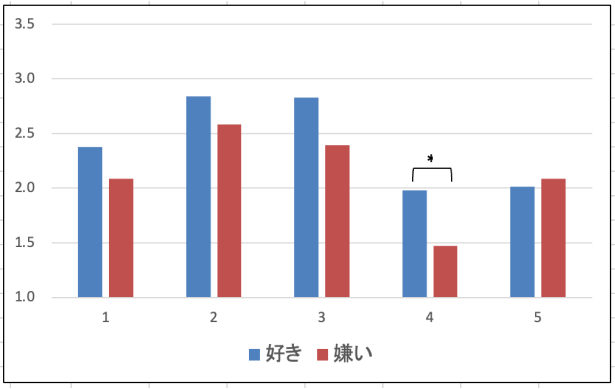

図 2 ① 好き vs. 嫌い

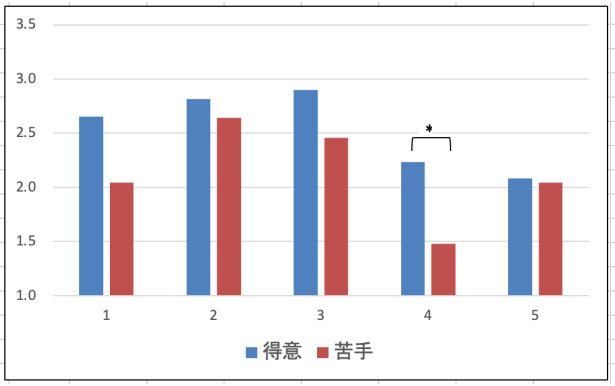

図 3 ② 得意 vs. 苦手

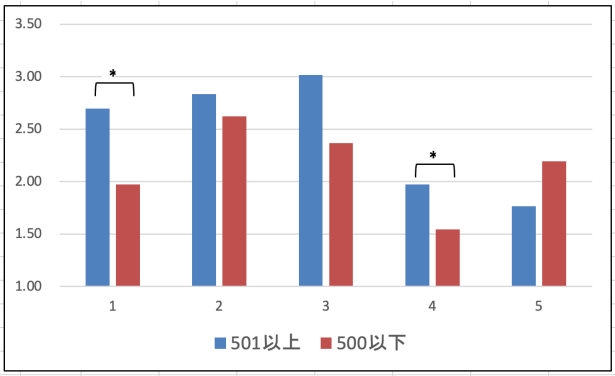

図 4 ④ TOEFL スコア高 vs. 低

3-4. 道具類・移動手段・他者に関する結果

主体性の拡張に関わる「道具類」「移動手段」「親しい他者」のメタファー文について，①，②，④内の 2 群の評定値平均は以下の通りである．

道具類： ① 好き 3.04，嫌い 3.23
② 得意 3.28，苦手 3.10
④ 501 点以上 3.46，500 点以下 3.00

移動手段：① 好き 3.17，嫌い 2.59
② 得意 3.23，苦手 2.69
④ 501 点以上 3.11，500 点以下 2.70

他者： ① 好き 2.33，嫌い 1.82
② 得意 2.30，苦手 1.94
④ 501 点以上 2.19，500 点以下 1.96

全体で比較的高い値（3 以上）を示したのは，道具類と移動手段であった．これは，英語を「ツール」と見る考え方が社会的に定着していることや [5-7]，海外への渡航手段は英語使用を連想させやすいことが影響しているかもしれない．2 群間の比較では，「親しい他者」の①にのみ有意差があった（「好き」群が有意に高い，$p < .01$）．

3-5. 語句ごとの違い

本研究では，あらかじめ設けた区分それぞれの中の 3 語が自己拡張の観点からは均質なものである，という前提で分析してきたが，事後的探索により，同一区分でも語句による違いが一部にあることがわかった．たとえば身体部分（区分 1）では，「心臓」が極端に低い値であった．

心臓： ① 好き 1.55，嫌い 1.52
② 得意 1.75，苦手 1.44
④ 501 点以上 1.75，500 点以下 1.42

骨肉： ① 好き 2.61，嫌い 2.33
② 得意 2.90，苦手 2.28

④ 501 点以上 3.13，500 点以下 2.12

手足： ① 好き 2.97，嫌い 2.42

② 得意 3.30，苦手 2.41

④ 501 点以上 3.11，500 点以下 2.38

「心臓・骨肉・手足」の項目を要因とする一元配置分散分析では有意差があり（$p < .01$，$\eta^2 = .15$），項目間多重比較では「心臓」vs.「骨肉」および「心臓」vs.「手足」に有意差が検出された（ボンフェローニ補正後：$ps < .01$）．身体部位のなかでも心臓のみがこのように低い評定値だった原因は，心臓が不随意筋であるため意識的に動かせないのに対し，筋肉や手足は意識的に動かせる，という「意図性・主体性」の違いがあるためかもしれない．

4. 考察および示唆

以上の結果から，以下の考察が得られる．

1. 英語が「好き」「得意」「習熟度が高い」のいずれの群においても，区分 4（接近可能な屋外の空間）に関して他方の群よりも英語学習意識との合致度が有意に高かったことから，理工系大学生の英語学習意識の特徴が出やすいのは「プライベートな閉じた空間から出ることを含意するが，身近で接近可能な程度の距離」のメタファーにおいてであることが伺える．
2. 英語の客観的習熟度でのみ区分 1（身体の部分）が有意となったことから，英語を自己の身体の一部と感じるかどうかは習熟度と関連があることが示唆される．
3. 「英語が好き・嫌い」の 2 群でのみ「親しい他者」のメタファー文に有意差が検出されたことから，英語への親近感と，友達やペットなどの有情的存在への親近感は連動しやすいようである．

特に上記の 1 について，なぜそうなるかの原因・動機の解明は今後の課題であるが，外国語である英語はプライベートな自己や家族などと異なる「外部」との接触を想定させる，という点と関連するのかもしれない．ある程度英語学習が進むとこれが可能と感じられる（英語が自己の拡張と捉えやすくなる）であろうが，英語スキルに自信や興味がなければ「外部との接触」は自己拡張とは意識されにくいだろう．英語という外国語の「外部感」と，習得した英語スキルがどこまで「自己の拡張」と感じられるかが関連しているのではないか，という本研究の当初の予想と矛盾しない結果であった．

また，今後への示唆・課題として以下が挙げられる．

1. 上記 1 の結果・考察と関連するが，今回の結果が「理工系大学生」のみの特徴なのか，それとも日本人英語学習者一般（社会人や人文系の学生，中学・高校生など）に広くみられる特徴なのかは，今後の研究で確認してゆく必要がある．さらには，日本語話者にとどまらず人間にとっての外国語学習に普遍的な現象なのか，という点も興味深い．
2. 「道具としての英語」vs.「教養（自己の内面世界の拡張）としての英語」をめぐって長期にわたり英語教育論争が起きている [5-7]. 自己拡張は,「道具の使用」と「内面世界の拡張」の両方と関連するので，英語教育で盛んなこの議論の対立点を統合した視座を創出できるかもしれない．英語学習意識にあらわれる自己拡張の認知科学的探求により，応用言語学・教育学・社会学等をつなぐ学際研究の可能性が広がるだろう．
3. これまで認知言語学研究では，母語であることを前提に，「言語」を捉える際にどのような概念メタファーがあるかが研究されてきた．英語に広範にみられる「導管メタファー」[8]や，日本語において特徴的な，言葉を「液体」としてみるメタファー[9]などである．これらについても自己拡張の観点から整理し直せるかを検討したい．そして，学習している言語と母語の間にどのような捉え方の違いがあるかを明らかにしたい．

文献

[1] Clark, A., (1997) Being there: Putting brain, body and mind together. Cambridge: MIT Press.

[2] Gallagher, S., (2000) “Philosophical conceptions of the self: implications for cognitive science”, Trends in Cognitive Sciences 4 (1): 14-21.

[3] Lakoff, G. & Johnson, M., (1987) Metaphors we live by. Chicago University Press.

[4] Lakoff, G. & Johnson, M., (1999) Philosophy in the Flesh. Basic Books.

[5] 江利川春雄 (2022)『英語教育論争史』講談社.

[6] 大津由紀雄・亘理陽一（編）(2021)『どうする，小学校英語？』慶應義塾大学出版会.

[7] 平泉渉・渡部昇一 (1995)『英語教育大論争』文藝春秋.

[8] Reddy, M., (1979). The conduit metaphor. In A. Ortony (Ed.), Metaphor and thought. Cambridge: Cambridge University Press.

[9] 野村 益寛 (2002)「<液体>としての言葉：日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐって」大堀壽夫編『認知言語学 II：カテゴリー化』東京大学出版会.